

SCRP報告

SCRP報告

歯学科4年 大野 晴 日

2017年8月18日に、私は新潟大学の代表としてSCRPの日本代表選抜大会に出場して参りました。SCRPとは、日本歯科医師会の主催で開催される大会で、各大学により選抜された歯学部所属の学生が、持ちブースで審査員への説明および質疑応答をすべて英語を使用して行う研究発表大会です。

私の発表タイトルは「酒粕抽出物はRunx2を活性化して骨芽細胞分化を促進する」でした。詳しい研究内容の説明はファカルティーアドバイザーを務めて頂いた柿原先生にお任せして、せっかく頂いた文章の場ですので、ご尽力頂いた全ての人への感謝と発表を終えた素直な気持ち、そして発表までの道のりを私なりに皆様へお伝えしたく思います。

私は明確にどの分野で研究を行いたいという意思はあったわけではありませんでした。純粋に英語が好きで、学年が上がったら是非出場したい！というぼんやりとした憧れのまま3年生の冬を迎えました。今年度は薬理学でSCRPの研究をするという先生方のご意向に沿う形で、薬理学教室にて柿原先生のご指導のもと研究を始めました。当初薬理学でまさか研究をするとは思っておらず、研究内容も検討が付きませんでした。ある日の柿原先生からの「日本酒は興味ある？酒粕を使った研究があるんだ」という言葉で新潟の名産品を利用した研究ができるとは大変興味が湧きました。(私は酒どころ新潟の出身で大の日本酒好きでしたので、なんて運命的なんだ！と感じました笑)

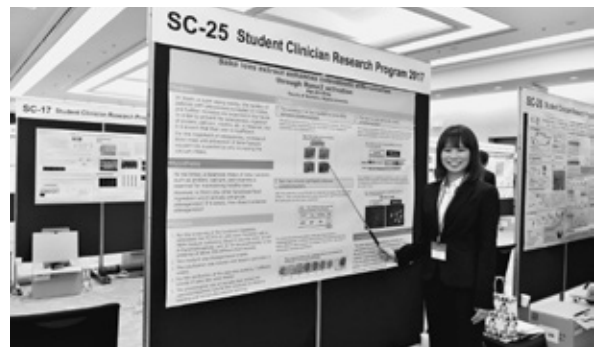
全くもって実験操作は不慣れで、実験結果が出るまでは随分と時間が掛かりました。また、実習が遅くまであったり、ちょうどこの夏は主将を務める弓

道部の現役最後のデンタルがありましたので、研究と実習、部活との両立に頭を悩ませることもありました。ようやく実験結果が出た頃にはSCRP本番はすぐそこに迫っていました。原稿、ポスター、質疑応答対策を最後の数日で終わらせ詰め込み学内予演を行わずに本番迎えるというギリギリさで、先生方には大変ご迷惑をお掛けしました。

当日、全国の大学の代表が他のブースで堂々と発表し、受け答えているのが聞こえてきて、その研究内容の難しさや英語力の高さに圧倒されてしまいました。私の発表では、受けた質問にうまく答えられないもどかしさを感じましたが、胸を張って発表できたと思います。もっと自分の両立がうまくいっていただくと後悔することもありましたが、とてもよい思い出となりました。また、SCRPを通して他大学の志の高い同輩や先輩、そして後輩に出会い、同じような悩みを抱えていたり、将来の事を話すことができ嬉しく思いました。

SCRP後は研究は続けていないのですが、歯科医師となった後に研究に携わることも今後の人生設計の1つになりましたし、英語力の向上に努めたいと今一度思いました。

最後になりますが、本大会に参加するにあたり多くの方のご支援とご協力を賜りました。歯学部生の今しか体験することができない、素晴らしい機会を与えてくださった、皆様への感謝を申し上げます。かけがえのないこの経験を胸に日々精進して参りたいと思います。



SCRPをきっかけにして

歯科薬理学分野助教 柿原 嘉人

去る平成29年8月、スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム（SCRP）日本代表選抜大会に本学歯学部を代表して、大野晴日さんが研究発表を行いました。『伝統的発酵食品である酒粕が、骨を作る主役である骨芽細胞にどのような効果をもたらすのか？』という酒処新潟ならではの研究テーマです。酒粕は、酒を搾った後の搾り粕ではありますが、“粕（カス）”と呼ぶにはモツタイナイほどの豊富な栄養素が含まれています。タンパク質を始め、ビタミンやミネラル、必須アミノ酸、糖類などを含み、とても栄養価が高く、また、麹菌や酵母菌の発酵によって生じた二次代謝産物などの生理活性物質も多く含み、近年注目されているスーパーフード（?）です。新潟県のスーパーでは他県に比べて多くの酒粕が売られており、気軽にスーパーで買えるという意味では、確実にスーパーフードです。先人たちは、この酒粕を捨てるのはモツタイナイと、甘酒、粕漬けや粕汁として食してきました。今もこのモツタイナイ精神は、クックパッドなどのレシピサイトに脈々と受け継がれ、パンやピザの生地、スポンジケーキ、クリームチーズ、ドレッシング、スムージーなど様々なカタチにアレンジされたものが紹介されていますので、みなさんも是非一度お試しください。

ところで、『なぜ酒粕を骨芽細胞にふりかけようと思ったのか？』その理由については、かつて江戸時代には、酒粕が酒骨（さかぼね）と呼ばれていたこと、また、ローマ字表記するとSAKA BONEとなり、B級サスペンス映画にでてくる暗号のように“BONE（骨）”が浮かび上がってきたというのが最大の理由です。まあ冗談が長くなってしまいましたが、この無謀な研究テーマに、あるときは歯学部弓道部主将、そしてまたあるときは寿司屋のホール係りという二つの顔を持つ大野さんが、忙しい合間を縫って、弓矢をピペットマンに持ち替えながら、一寸の迷いもなく、一生懸命取り組んでくれました。途中、大野さんが家で飼っている高級トカゲちゃん（壱万円ナリ）の体調が悪くなり、トカゲちゃんの容態を案じて骨芽細胞の培地交換をちょっと間違えることも1回くらいはありました（ドンマイ!）。実験は失敗してナンボのもんです。その成果が実り、大野さんは、新潟の上越地方にある小さな酒蔵の酒粕が最も骨芽細胞を元気にするという現象を世界で初めて発見することができました。惜しくも、SCRPでは受賞の一步手前にとどまりましたが、現在、この研究成果は、次の学生たちへ脈々と受け継がれ、今では新潟県内の研究所や酒造メーカーを巻き込んでさらなる発展を遂げており、いつの日かノーベル賞はムリですが、イグノーベル賞を獲る日が来るかもしれません。大野さん、授賞式には一緒に行きましょう。

SSSV報告

オーストラリア短期留学を経験して

歯学科4年 板 離 子

私は、4年生の夏休みを利用して同学年の山本さんとオーストラリアのチャールズスタート大学(CSU)へ約2週間の間、短期留学をさせていただきました。CSUへのSVは今回から始まったプログラムで、私なんかが最初に行ってもいいものか感じていましたが、せっかくこのように貴重な機会をいただいたのだから、少しでも良い経験になるようにしようと思って準備を進めました。今回、歯学部ニュースという場をお借りして、私たちがCSUで経験したことを多くの人に少しでも伝えることができれば嬉しいです。

今回のプログラムでは、事前にCSUの先生と連絡を取り合い、留学中にやりたいことを具体的に伝えることができたため、学生の臨床実習の見学だけでなく、基礎実習の見学やその講義を受けることもできました。

CSUでは2年生から臨床実習が始まります。最初はクリーニングなど易しいものから始めるのですが、4年生にもなると患者さんへの説明、アマルガムを用いた歯冠修復など、慣れた様子でスムーズに治療を行っていて、同じ4年生であるのに、歯科に関する知識や技術にこんなにも差があるのかと、とても大きな衝撃を受けました。実習において、学生たちは2人ペアになり、それぞれ術者とアシスタントを務めます。3年生は2年生とペアを組んでユニットの使い方や衛生管理、治療内容について教え、4年生は4年生同士でペアを組み、治療に関してお互いに意見を交換しアドバイスをし合っていました。このようにペアを組んで一連の治療を行うことは、お互いの意識や

技術の向上につながり、同じ学生という立場だからこそ気づくことができることも多く、とても魅力的に感じました。

主に3年生が行っていた基礎実習は、基本的に『講義→デモンストレーション→模型実習』という流れになっており、臨床を意識した教育が行われているように感じました。実習室の様子や実習形態が私たちの行っているものとほとんど同じであったり、NISSINの顎模型など日本のメーカーのものを使っていたりするなど、似ている部分も多くありましたが、直前に該当する内容の講義を受けているため、理解しやすく、学習効果が高いのではないかと感じました。

留学中はCSUの寮に滞在しました。私たちが滞在した寮は、月に2回ほど寮のメンバーで食事に行ったり、隣の寮の人たちとネットボールで対決したりするなどイベントも多く、とても楽しい時間を過ごすことができました。また、寮の仲間だけではなく、歯学部の学生や先生方もすぐに私たちのことを覚えて気にかけてくださり、たくさんの人たちのおかげで最初は不安だった留学生活も徐々に楽しめるようになり、自分からコミュニケーションを図ることができるようになりました。

今回、SVに参加して海外へ行ったことで、ここには書き切れないほど多くの素晴らしい経験をする事ができ、CSUの学生から多くの刺激を受けました。私たちが春からはよいよ5年生になり、臨床実習に向けた準備が本格的に始まります。CSUで見たこと、感じたことを今一度思い出して臨みたいと思います。

最後に、今回のSVに関わってくださった石田先生、照沼先生はじめ多くの方々へ感謝申し上げます。



寮の仲間たちと食事に行った時のもの



大学の技工室で4年生たちと撮ったもの

タイにまた行きタイ

歯学科4年 加藤 哲也

毎号の歯学部ニュースでSVに関する記事は必ず読んでいますが、海外に短期留学するなんて別世界の人間がすることだと思っていました。7月31日午前0時40分JAL33便、私は引率の魚島先生と言葉も分からない国タイに向かいました。

さて、バンコクに到着した私たちは、国内線に乗り換えてハジャイ国際空港に到着し、プリンスオブソクラ大学（PSU）に向かいました。想定内でしたが言葉が通じません。ここで私は酷くナーバスになり、一日目にして「先生と一緒に帰りたい」という始末でした。

PSUでの私のカリキュラムは、口腔外科、小児歯科、矯正歯科の見学でした。手術の見学機会がまだ無い私にとって、口腔外科の見学は興味深いものでした。抜歯やインプラントなど日本でも馴染みのある症例はもちろん、拳銃で顔を撃たれた人の顎骨再建手術なども見学し、ここは日本ではないと再認識させられました。実際に治療の補助もして、良い経験でした。小児歯科では齲蝕治療や抜歯を主に見学しました。タイの子供は、場所によっては齲蝕率が非常に高く、大学病院で治療しなければならないほどの症例も多いらしいです。また、全身麻酔下における小児の治療も見学

し、大変貴重な経験をしました。矯正歯科は、予習を兼ねて見学しました。タイは矯正治療が盛んらしく、私が現地で会った人も多くの方が矯正治療をしていました。年齢層も幅広かったです。

日常生活ですが、一番の心配は食事でした。しかし、食事はとてもおいしく日本人の味覚に合うものばかりでした。私は屋台で食べたパッタイという焼きそばが気に入ったのですが、「アローイ（タイ語でおいしい）」と喜ぶ私のことを、現地の人は不思議そうに見ていました。タイの人にとってはごくありふれた食べ物だからだそうです。毎日、色々なお店に連れて行ってもらい、今ではタイ料理が恋しいくらいです。

休日は、車で遠くに連れて行ってもらいました。動物園、お寺巡り、ビーチ、宗教儀式など日本にいたら絶対に経験することができない経験をさせてもらいました。動物園はとてもスケールが大きく、柵も低いので動物を目の前で見ることができました。お寺巡りは、象を祭っているという寺を巡りました。岩山を削って作った寺はとても壮大で、本当に現実の光景なのか分からない位でした。参加した宗教儀式は、これからの人生がスムーズになるようにとの願いを叶えるそうです。楽しい時はあっという間に過ぎるもので、当初はどうなるかと思っていたSVも最終日にはもっとタイにタイ在しタイと思えるほどでした。いつかまたタイに行きタイと常々思うのでした。



SSSV報告

歯学科3年 沼田 真有紀

私は2017年8月2日～12日の期間、インドネシアのガジャマダ大学に短期留学をさせていただきました。ガジャマダ大学は、インドネシアのジョグジャカルタの中心部に所在する国立大学で、インドネシアのなかでも最古で最大の大学の一つです。18もの学部数を有し、5万人以上の学生が在籍します。キャンパスは広大で、自転車を使って周ってもとてもエネルギーがいります。大学の周辺にはたくさんのお店が並び、にぎわっていました。

今回私が参加したのはガジャマダ大学歯学部が毎年開催しているUGM dental summer courseというプログラムで、新潟大学から2人、徳島大学から3人、バリの大学から2人、スマトラの大学から6人の学生が参加しました。他大学合同のSVは他にもあると思いますが、日本人以外の参加者がいる点で特徴的だったのではないかと思います。スケジュールは細かく組まれていて充実した10日間を過ごしました。今回の参加者には高学年の生徒がいなかったため、臨床的な実習や病院見学というより、薬草に関する講義や実習が中心のプログラムでした。インドネシアには貧しい人々が多いため、誰でも気軽に使用できる薬草を用いた齲蝕予防がなされています。講義や実習、課外実習を通して薬草の種類や、加工法について学びました。普段大学で聞くことのない内容の講義で新鮮でした。また、大学のシャトルバスで往復8時間以上かけて山村の地域へ、住民が飲水として使用する川の見学に行きました。その川のフッ素濃度はアパタイト結晶によって非常に高くなっており、住民の歯に着色が見られるなどの影響を目で見て学習しました。プログラムの中で一番衝撃的だった実習は縫合のレクチャーです。半切されたヤギの頭を用いました。結構インパクト強めな光景だったのですが、インドネシア人たちはヤギ

の頭の写真を撮り、インスタグラムにアップしていました…。文化の違いを一番感じた瞬間でした。スケジュールの中には観光もたくさん盛り込まれていました。世界遺産の一つであるポロブドゥール遺跡は、何段もの急な階段を上るのはとても大変でしたが（悟りへの道と言うそうです）、壮観でした。また、キティちゃんの電飾付き四輪自転車に乗せられた日もありました。人と車と四輪自転車で溢れたエレクトリカルパレードのような光景は異様で面白かったです。

夏休み期間中なこともあり、ガジャマダ大学の学生が毎日朝から晩まで付きっきりで対応してくれました。人混みに行く際も前と後ろに学生がついてくれるので常に安心して過ごせました。インドネシアの人々は、少し時間にルーズなところもありますが（笑）、みんな優しくて積極的です。実習などで皆の後ろから見てみると、前に行きなよ、と背中を押してくれます。日を重ねるにつれて参加者同士の仲はとても深まりました。帰国前日の夜には、ホテルの一室に集まり、夜遅い時間まで雑談が尽きませんでした。

インドネシアで初日から対応してくれた友人が、先日新潟大学に短期留学に来てくれました。再会できてとても嬉しかったです。留学生対応にはまだ不慣れな私ですが、恩返しをしたい一心で自分なりに気を配り、その友人をはじめとする留学生の皆さんと会話を楽しむことができました。留学生の皆さんに喜んでもらえる、留学に行ったような気分になるくらい楽しかったです。また、他のインドネシアの友人も今後日本に旅行に来てくれる予定で、留学を通して築いた友人関係を絶やさないようにしていきたいです。

この短期留学では、現地の学生や先生方、同行した2年生の岸本さんと泉先生、魚島先生、石田先生をはじめとする新潟大学の先生方、家族の支えによって沢山の貴重な体験をすることができました。この感謝の気持ちを忘れず、日ごろの行いやネクサスの活動に還元していきたいと思います。



歯周パックを用いた実習にて



ボロブドゥール遺跡



電飾付き四輪自転車



フェアウェルパーティーの様子

国際シンポジウム開催報告

新潟大学・台湾歯学部合同シンポジウム開催報告

生体歯科補綴学分野 長 澤 麻沙子

2017年11月18、19日に台湾の国立陽明大学歯学部にて新潟大学・台湾歯学部合同シンポジウム (International Collaborative Symposium Faculty of Dentistry Niigata University-Schools of Dentistry Taiwanese Universities “Shaping the future of the collaborations in dentistry.” Taipei, Taiwan, 18th and 19th November 2017) が、本学の前田健康学部長・陽明大学のAllen Ming-Lun Hsu学部長を大会長として開催されました。実行委員長の魚島教授の下で、私が新潟大学側の幹事を務めさせていただきましたので、ここにご報告させていただきます。このシンポジウムはグローバルな視野を持った若手育成を推進する文部科学省のねらいに沿う形で、本学の資金提供により毎年開催してきた共同シンポジウムの一環です。内容は摂食嚥下、ニューロサイエンス、インプラント、オーラルヘルスプロモーションの4つをテーマとしたシンポジウムの他、様々な分野からの口演発表およびポスター発表が行われました。新潟からは32人、台湾からも31人程参加し、大学院生や若手教員を中心に英語での発表と活発な質疑応答が行われる場となりました。

台湾の先生方の心温まるお迎えから始まった今回のシンポジウムは、これまで新潟大学歯学部が開催してきた国際シンポジウムとは若干異なり、かなりタイトなスケジュールでした。会場とホテルが離れており、会場周辺には徒歩で出かける場所が無かったことから、ほぼ丸2日間、朝9時から夕方5時まで会場に缶詰めでした。ですので、日中は普段知る事の無い他分野の研究を会場でひたすら聞くといい、とても貴重な経験ができた

と思います。この類のシンポジウムは他科の先生方、大学院生と交流できる数少ない良い機会でもあることを実感しました。日中の空き時間が無かったので、夜の台湾では皆それぞれが思い思いの台湾を満喫されていたのではないかと思います。

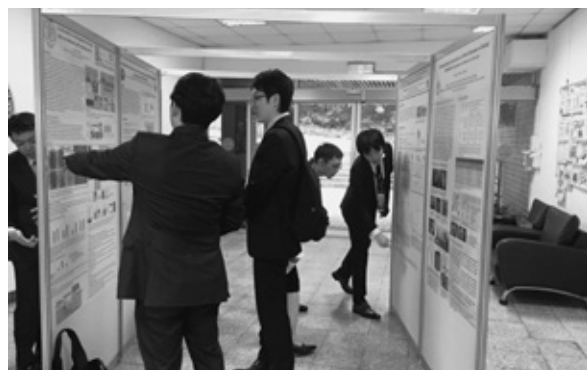
参加者の皆さんが素晴らしいご研究をなさっていることはもちろんのこと、おそらく全ての先生方が感じたのではないかと思うのが、台湾の方々のおもてなしでした。皆さん、ここまで親切にして下さるのか、と思うほど良くして下さいました。シンポジウムの準備段階でのやり取りで、台湾の準備責任者の先生が「台湾に来たら、日本にいるように居心地がよく過ごしてもらえようになりたい」とおっしゃっていた意味がよくわかりました。日本人が得意とするおもてなしの心は台湾人でも同じなのだと感じました。

個人的な感想ですが、新潟大学歯学部は何年も前から若手教員・大学院生を、国内のみならず国際的に様々な分野で活躍できる人材に育てよう多大なる努力をしてきたと思います。その結果、私が大学院生だった頃よりも、今の大学院生は英語での発表や質疑応答のレベルが上がっていると感じましたし、若手教員はこういった経験に基づいて歯学部を牽引できる中堅的な存在として、とても頼もしく感じました。私も今後一層努力しようという決意を新たにしました。いずれにしましても、海外でのこういったシンポジウムは海外の先生方と交流し、親交を深めることができる機会になるのはもちろんのこと、大学院生や若手教員にとっては英語での発表の場を与えられ、若手でもなくとも研究者や教育者としての視野を広げることができる、本当に良い機会だと改めて感じました。

最後になりましたが、前田先生、Allen Ming-Lun Hsu先生、魚島先生、台湾幹事のWan-Chun Li先生をはじめとしまして、多くのご協力

いただいた先生方にこの場をお借りしまして心よりお礼を申し上げます。新潟大学・台湾歯学部合同シンポジウムが、台湾の先生方とのコラボレー

ションの端緒となりますことを心より祈念し、ここにご報告とさせていただきます。どうもありがとうございました。



ジャカルタシンポジウム 「International Collaborative Symposium on Development of Human Resources in Practical Oral Health and Treatment」について

予防歯科学分野 小川 祐 司

2018年2月11日から13日まで、インドネシア・ジャカルタにて、国際シンポジウム「International Collaborative Symposium on Development of Human Resources in Practical Oral Health and Treatment」が新潟大学歯学部主催、インドネシア大学歯学部共催で行われた。人材育成（現代社会に対応する実践的口腔医療人育成プログラム）がメインテーマの本シンポジウムは今回で7回目となり、日本・インドネシアをはじめ、台湾・タイ・オーストラリア・フィリピン・ベトナムから100名余の参加となった。

開会にあたり、Kusdhanyインドネシア大学歯学部長、前田新潟大学歯学部長による歓迎の挨拶があり、続けてインドネシア大学歯学部生による舞踊ダンスが披露されて会場に華を添えた。

5つの特別講演では、東京医科歯科大学江藤名誉教授が日本の高齢者口腔保健の概要を紹介されたのをはじめ、本学齊藤准教授が乳歯由来の組織特異的幹細胞について、依田准教授が頭蓋顔面形成におけるグルコース代謝の役割に関してそれぞれ新しい知見を含めた研究内容を報告、さらにイ

ンドネシア大学からHimawan教授がインドネシアにおける顎関節症の展望について、Soegiharto先生が臨床における矯正治療の重要性についてそれぞれ興味深い講演を行い、参加者と活発な議論を繰り広げた。

また2つのシンポジウムセッションでは、口腔疫学と顎顔面補綴にテーマをおき、口腔疫学は新潟で20年続く高齢者コホート研究を中心にその学術知見が報告され、顎顔面補綴はインドネシアの取り組みをメインに診断からマネジメントまでの多角的な視点での研究最前線が紹介された。

その他、24の一般口演と26のポスター発表が行われ、基礎・臨床・疫学と多岐にわたる研究内容の構成となった。大学院生や若手研究者を含めた英語による議論はそれぞれに切磋琢磨が認められ、各人の英語力向上を後押しする絶好の機会となった。

参加学部長（代理を含む）を囲んでの新潟大学/ASEAN歯学部長会議は、インドネシア大学、ガジャマダ大学、エアランガ大学、陽明大学、チュラロンコン大学、コンケン大学、チェンマイ大学、スラナリー工科大学、タマサート大学、プリンスオブソクラ大学、ハノイ医科大学、マニラセントラル大学、チャールズスタット大学の13大学の参加のもと開催され、新潟大学歯学部とアジアの交流協定締結校の間で実施している学部学生、大学院学生、教員の人材交流に関する実績報告のほか、次なるシフトアッププログラムを探索する活発な議論が交わされた。



開会で挨拶する前田歯学部長



江藤東京医科歯科大学名誉教授、インドネシア大学歯学部のメンバー



講演する依田准教授



講演する齊藤准教授



新潟大学/ASEAN歯学部長会議



初日に行われたウエルカムパーティ